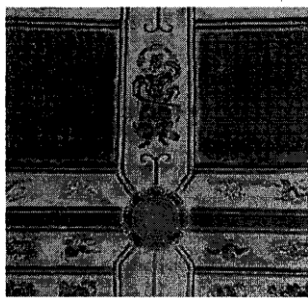


慈眼寺と江口の君

野崎観音で知られる慈眼寺の三十三所観音堂の裏手に鐘楼があり、ここには宝永5年（1708）に鑄造された梵鐘があります。この梵鐘には、慈眼寺第五代住職の大真が記した寺の縁起が刻まれています。

この縁起によると、平安時代、江口長者とも呼ばれた江口の君は、病氣平癒のため奈良の長谷寺観音に参詣し、夢告を受けて慈眼寺の十一面観音に参詣したところ病気が治ったため伽藍を再興しました。その後、永仁2年（1294）に入蓮と秦氏によって伽藍が修復されましたが、戦国の争乱によって堂宇が灰燼に帰してしまいました。江戸時代になって曹洞宗の僧侶である青巖が入寺したため、以後寺は曹洞宗となり、第四代住職嶺南によって、観音殿・薬師堂・台所・寮舎などが再興されました。さらに大真の時、梵鐘を鑄造することとなり、寺の縁起を後世まで伝えるため梵鐘にこれが刻まれたということです。



梵鐘拓本

寺の歴史と深く関わりのある江口の君とはどのような人だったのでしょうか。「江口」とは、摂津国の淀川と神崎川の分岐点（現・大阪市東淀川区）と思われるます。しかし、慈眼寺が所蔵する江戸時代に書かれた「江口之君縁起」によると、君の生国ははっきりしませんが、一条天皇の女官であったともいわれています。容貌清雅で、播磨国書写山田教寺（現・姫路市）の僧性空は、君を拝んだところ普賢菩薩に見えたことや、西行法師が四天王寺参詣からの帰りに一夜の宿を借りるため君と和歌の送り合いを行ったと記されています。

ここに見られる性空の伝記や、西行との和歌のやりとりの話は鎌倉時代の説話集にも見られ、室町時代には能の名手として著名な観阿弥・世阿弥の能台本「江口」に取り入れられて広まってきました。さらに江戸時代になると、「江口」に関連して、江口の君と西行が和歌をやりとりする場面や、遊女の君が白象に乗った普賢菩薩として絵画に描かれ、庶民の間でも広く親しまれていくこととなりました。

慈眼寺では、このように広く庶民にまで受け入れられていった江口の君を寺の縁起に取り入れることで、たくさんの人から親しみを抱かれるお寺にしようとしたのではないのでしょうか。

梵鐘の拓本と「江口之君縁起」は、歴史民俗資料館で現在開催中の「慈眼寺と野崎まいり」展で展示しています。

（大東市立歴史民俗資料館）

新古今物語 第38話 「古堤街道発展の歴史」

大阪・京都・奈良の三都に挟まれた河内平野には、古くから各都市を結ぶ街道が発達してきました。大東市域には、大阪と奈良を結ぶ古堤街道、河内平野を南北に結ぶ河内街道、京都と高野山を結ぶ東高野街道の三つの街道が通っていました。今回から小欄では、これらの街道を歩きながらそこに残る文化財とそれまつわる逸話などについて紹介していきます。まずは、市内を東西に走る古堤街道から歩いてみましょう。



古堤街道の石標
住道本通り商店街に
立つ「古堤街道」の
刻まれた道標

上交通が盛んでしたが、18世紀初めの大和川付け替えと深野・新開両池の新田開発後は、田園地帯を横断する陸上交通が発達しました。古堤街道のルートもこの時期に形成されたとされています。

江戸時代にはこの道は「中垣内越」生駒越「古堤路」などの名称で呼ばれていました。明治20年代頃に現在の呼び名に定まりました。堤防上の道であることに由来する名称でした。また、古堤街道は別名「こでか」とも呼ばれ、今でも年配の世代にはこの名称で呼ぶ人がいます。

古堤街道は、大阪から奈良、伊勢方面に向かう人々が利用したほか、江戸時代中期より盛んになった野崎参りの参詣コースとしても利用されました。現在でも街道沿いにはこれらの行き先を示した道標が立っています。今回は、諸橋を出発して古堤街道を東に向かいます。

（生涯学習課）